

原著：秋田大学医学部保健学科紀要18(2)：1-9, 2010

産褥一ヶ月時の母親の育児不安と Self-Esteem との関連

渡 邊 香* 篠 原 ひとみ**

要 旨

産褥一ヶ月時の母親の育児不安と妊娠末期、産褥早期、産褥一ヶ月時の Self-Esteem (以下、SE と表す) との関連を明らかにすることを目的にアンケート調査を行った。対象は112名の母親で、同一対象者に3回(妊娠末期、産褥早期、産褥一ヶ月時) Rosenberg 自尊感情尺度による調査および産褥一ヶ月時に育児不安尺度による調査を実施した。その結果、妊娠末期、産褥早期、産褥一ヶ月時の SE 得点に有意差はなかった。母親の SE 得点は育児不安得点と正の相関、育児不安尺度の下位尺度である「精神的苦痛」、「疲労感」、そして「役割不全感」と正の相関があり、母親の SE 得点が高いほど育児不安得点が高かった。その理由として SE の高い母親は理想の母親役割に向けて育児に積極的に取り組み、精神的苦痛や疲労感を増強させていることが考えられた。一方「育児によって自分が成長している」と考える母親の SE 得点はそう考えない母親に比べて有意に高かった。これらのことから、育児不安の対策として、妊娠期に SE を測定し、得点が高い母親に対して一人で頑張る育児にならないような支援策を育児開始前から立てる必要性が示唆された。

I. 緒 言

近年、子ども虐待の背景要因として育児不安が指摘されており、育児不安への関心は高まっている¹⁾。特に、産後一ヶ月間の育児は、栄養、排泄、罹患など様々な面で未だ不安定な部分を残しているという児側の要因と、体力的にも復古途上であり、マタニティーブルーに代表されるように精神的にも不安定な時期に当たる母親側の要因が絡み合って最も育児不安が高まる時期である²⁾といわれており、育児の初期段階として非常に重要かつ配慮を要する時期である。

一方、女性が母親になり子育てをすることにおいて、自己に対して「これでよい」と感じる自尊感情 Self-Esteem (以下 SE と表す) の高いことが、適応していく重要な鍵になる³⁾といわれており、産褥一ヶ月時の育児不安の高い時期を乗り切る上で母親の SE の高さが重要であると考えられる。SE は子ども時代に両親からどのような扱いを受けるかによって左右されるこ

とや、SE の高い両親は、子どもに関心をもち子どもの意思を尊重する⁴⁾ことから、親になる者は愛情をもって子どもを育てるために高い SE をもっていることが望ましいと考える。SE の上昇・下降に関与するものとして、長期のストレスは SE を引き下げ、一貫した成功の経験は自己概念を積極的に変化させ SE の上昇に影響を及ぼす⁵⁾といわれている。女性にとって妊娠および分娩、産褥経過は妻から母親になる発達側面からみて重要な役割変化のプロセス⁶⁾であり、SE を変化させる要因になると考えられる。

母親がもつ育児不安については、牧野⁷⁾は「育児行為の中で一時的あるいは瞬時的に生じる疑問や心配事ではなく、持続し蓄積された不安の状態である」と定義し、子の現状や将来あるいは育児のやり方や結果に対する漠然とした恐れを含む情緒の状態を育児不安としている。育児不安の要因は、乳児の養護に絶えず配慮が必要であるという育児そのものの特徴、母親の性格、母親をとりまく社会的要因、母親の就労状況、出

* 秋田組合総合病院

** 秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻

Key Words: 母親

Self-Esteem

育児不安

産褥一ヶ月

生順位や月齢などの子ども側の要因⁹⁾がある。過去の研究では、育児の自己効力感に関連する要因⁹⁾や母親の生き方志向との関連をみたもの¹⁰⁾、母子画を用いて育児不安と自己肯定感との関連をみたもの¹¹⁾はあるが、母親の SE の経時的変化と育児不安との関連について調査した研究はみられない。育児不安の強い状態は自己に対して「これでよい」と考えられず、母親の SE が低い状態であることが考えられ、母親の妊娠期から産褥期における SE の変化と育児不安との関連を明らかにすることは育児支援の時期や対策を考える上で重要である。

そこで、本研究は産褥一ヶ月時の母親の育児不安と妊娠末期、産褥早期、産褥一ヶ月時の Self-Esteem との関連を明らかにすることを目的にアンケート調査を行った。

II. 研究方法

1. 研究対象

A 県内の A 総合病院、B 総合病院および C 産婦人科医院の外来にて妊婦健診を受診し、同院に分娩予約をしている妊娠末期（以下、妊娠期と表す）の妊婦 150 名を対象に質問紙による調査を行い、以降同一対象者に産褥入院中（以下、入院中と表す）、産褥一ヶ月健診時（以下、一ヶ月時と表す）に調査を行った。回収数は 143 名（回収率 95.3%）であり、このうち、経産分娩の 112 名を分析対象とした。各施設の分析対象数は A 総合病院 67 名、B 総合病院 21 名、C 産婦人科医院 24 名であった。

2. 調査期間と方法

調査期間は 2009 年 4 月～8 月であった。質問紙は、各施設の産婦人科スタッフに配布、回収を依頼した。妊娠期および一ヶ月時は外来の待ち時間に記入をお願いした。入院中は産褥 1 日目以降で対象者の時間的余裕があるときに配布してもらった。各期の質問項目に記入後は、対象者が保管するか、外来カルテに綴じ込み保管するか対象者本人に選択してもらった。回収は産褥一ヶ月健診時に対象者が添付の封筒に入れて厳封し、各施設の外来スタッフへ渡す形式をとった。

3. 調査内容

調査内容は、妊娠期・入院中・一ヶ月時の SE に加えて、妊娠期には属性として年齢、初経産の別、就業の有無、婚姻の有無、家族構成、一ヶ月時には分娩様式、授乳方法、育児支援者の有無および育児不安の程度であった。

4. 本研究で使用した測定尺度

1) Rosenberg 自尊感情尺度（山本らによる翻訳版）¹²⁾

各期の SE の測定には Rosenberg 自尊感情尺度を使用した。Rosenberg (1965) は、他者との比較により生じる優越感や劣等感ではなく、自身で自己への尊重や価値を評価する程度のことを自尊感情と考え、自分自身を「非常に良い (very good)」と感ずることではなく「これでよい (good enough)」と感ずる程度が自尊感情の高さを示すとしている。本尺度は、Rosenberg (1965) が作成した尺度の山本ら (1982) による翻訳版である。本尺度には複数の翻訳版が存在するが、本研究では原文に忠実で質問項目を削除および追加していない山本らのものを使用した。10 項目からなる単因子構造の尺度であり、逆転項目を 5 項目含む。1 項目 1 点から 5 点、得点可能範囲は 10 点から 50 点までであり、得点が高いほど自尊感情が高いとされている。

本研究における妊娠期、入院中、一ヶ月時の Cronbach's α 係数は 0.83～0.86 であり、いずれも高い内的整合性が確認された。

2) 育児不安尺度（牧野カツコ, 1982)⁷⁾

育児不安の測定には育児不安尺度を使用した。牧野は、産業疲労測定用に考案された「蓄積的疲労兆候調査票」を参考に育児不安尺度を作成した。育児に関する不安徴候の特性を、①一般疲労感、②一般的根気の低下、③イライラの状態、④育児不安徴候、⑤育児意欲の低下の 5 群に分類し、各群に negative と positive の両項目を含めた計 14 項目を 4 件法で測定し、採点時には positive 質問を逆転項目とする。得点可能範囲は 14 点から 56 点であり、得点が高いほど育児不安が高いとされている。総得点は正規分布に近似し、上位と下位 25% の両群間で各項目の育児不安出現率に有意差があるとして、尺度の有効性が認められている。

5. 分析方法

統計解析プログラムパッケージ SPSS v.9.5 を用いて行った。調査に使用した測定尺度の内的整合性については Cronbach's α 係数を求めた。育児不安尺度の因子分析には主因子法 (Varimax 回転) を用い、尺度得点間の関連には Spearman の順位相関係数を求めた。対象の属性と育児不安得点との関係や育児不安尺度の各項目 2 群間における SE 得点の差の検定には Mann-Whitney の U 検定を行なった。危険率 5% 未満をもって有意差ありとした。

6. 倫理的配慮

A 大学医学部倫理審査委員会の審査を受け、承認を得て行った（平成21年3月31日）。各対象施設の管理責任者の許可を得た後、対象者に対し、各施設のスタッフを介して文書と口頭で研究の趣旨、目的および方法について説明を行った。研究への参加は対象者の自由意思によるものであること、研究への参加拒否や途中辞退があっても不利益を被らないこと、プライバシー保護を厳守し、本調査以外の目的には使用しないこと、データは厳重に管理し、調査終了後は適切な方法で速やかに破棄することについて説明し、同意が得られた者を対象者とした。質問紙調査への回答をもって本研究への同意とみなすこととし、質問紙は封筒に入れて厳封のうえ回収し、研究者以外の者がその内容を知ることのないようにした。

Ⅲ. 結 果

1. 対象の属性（表1）

A 総合病院および B 総合病院はそれぞれの地域の基幹病院であり、病診連携システムをとりおおむね妊娠32週以降の妊婦健診から産褥一ヶ月健診までの診療を行っている。C 産婦人科医院は A 県内で最も分娩数の多い産婦人科診療所であり、初診から産褥一ヶ月健診までの診療を一貫して行っている。この3施設の妊婦はほとんどが Low risk または Moderate risk

表1 対象者の属性（n=112）

項 目	カテゴリー	人数 (%)
年 齢	10 歳 代	1 (0.9)
	20 歳 代	42 (37.5)
	30 歳 代	66 (58.9)
	40 歳 代	3 (2.7)
初経産別	初 産	51 (45.5)
	経 産	61 (54.5)
就労の有無	あ り	53 (47.3)
	な し	59 (52.7)
婚姻の有無	あ り	110 (98.2)
	な し	2 (1.8)
家族形態	核 家 族	87 (77.7)
	複 合 家 族	25 (22.3)
分娩様式	自然分娩	101 (90.2)
	吸引・鉗子分娩	11 (9.8)
一ヶ月時の栄養法	母 乳	62 (55.4)
	混合・人工	50 (44.6)
一ヶ月時育児支援者	あ り	111 (99.1)
	な し	1 (0.9)

である。

対象者の平均年齢は30.7±4.7歳であり、初経産別では、初産51名（45.5%）、経産61名（54.5%）であった。就労状況は、就労あり53名（47.3%）、就労なし59名（52.7%）であった。家族形態は、核家族87名（77.7%）、複合家族25名（22.3%）であった。一ヶ月時の児の栄養方法は母乳栄養が62名（55.4%）であり、111名（99.1%）に育児支援者が存在した。

2. SE 得点と育児不安尺度得点との関係

1) 育児不安尺度得点の因子分析（表2）

使用した牧野の育児不安尺度は、因子分析がなされていなかったことから尺度の構造を明らかにする目的で因子分析を行った。主因子法（Varimax 回転）にて分析した結果5つの因子に分かれた。第1因子は“毎日はりつめた緊張感がある”、“自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう”、“子どもを育てるためがまんばかりしていると思う”など、子育てを行う上での精神的な苦痛に関する3項目で構成されているため、「精神的苦痛」と名づけた。第2因子は“毎日くたくたに疲れる”、“朝、目ざめがさわやかである”、“考え事がおっくうである”、“生活の中にゆとりを感じる”、など、疲労感や精神的余裕のなさに関する4項目で構成されているため、「疲労感」と名づけた。第3因子は“自分は子どもをうまく育てていると思う”、“子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある”など、母親役割が十分果たせていないことに関する2項目で構成されているため、「役割不全感」と名づけた。第4因子は“子どもがわずらわしくてイライラしてしまう”、“子どもは結構一人で育っていくものだと思う”、“子どもをおいて外出するのは心配で仕方ない”など、子どもと自分が一体であり、子どもに縛られていると感じることに関する3項目で構成されているため、「束縛感」と名づけた。第5因子は“育児によって自分が成長していると感じられる”、“毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う”など、育児を行うことでの達成感ややりがいのなさに関する2項目で構成されているため、「不達感」と名づけた。

本研究における尺度の Cronbach's α 係数は0.69であった。また、5因子それぞれの Cronbach's α 係数は、第1因子 $\alpha = 0.67$ 、第2因子 $\alpha = 0.64$ 、第3因子 $\alpha = 0.59$ 、第4因子 $\alpha = 0.21$ 、第5因子 $\alpha = 0.61$ であり、第4因子以外の Cronbach's α 係数は0.6以上、あるいは0.6に近く内的整合性はほぼ満足できるものであった。

表2 育児不安尺度の因子分析

質 問 項 目	mean	SD	I	II	III	IV	V	共通性
I. 精神的苦痛 ($\alpha=0.67$)								
毎日はりつめた緊張感がある	2.911	0.77	0.569	0.297	0.266	-0.042	0.024	0.485
自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	2.964	0.73	0.712	0.267	0.048	0.001	0.003	0.585
子どもを育てるためがまんばかりしていると思う	2.83	0.63	0.759	-0.017	0.123	-0.119	-0.143	0.613
II. 疲労感 ($\alpha=0.64$)								
毎日くたくたに疲れる	2.268	0.74	0.406	0.568	-0.032	0.085	-0.108	0.508
朝、目ざめがさわやかである	2.482	0.64	-0.224	0.778	0.165	-0.145	-0.162	0.754
考え事がおっくうである	2.634	0.78	0.400	0.655	0.147	0.070	0.118	0.630
生活の中にゆとりを感じる	2.482	0.78	0.264	0.566	0.101	0.134	-0.020	0.419
III. 役割不全感 ($\alpha=0.59$)								
自分は子どもをうまく育てていると思う	2.625	0.66	0.045	0.104	0.855	-0.028	-0.070	0.750
子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある	2.304	0.73	0.274	0.143	0.726	0.042	-0.021	0.625
IV. 束縛感 ($\alpha=0.21$)								
子どもがわずらわしくて、イライラしてしまう	3.107	0.82	0.457	0.134	0.068	-0.506	-0.15	0.511
子どもは結構一人で育っていくものだと思う	2.446	0.75	-0.109	0.049	0.171	0.728	-0.133	0.592
子どもをおいて外出するのは、心配で仕方ない	1.911	0.73	0.181	0.104	-0.140	0.682	0.143	0.548
V. 不達成感 ($\alpha=0.61$)								
育児によって自分が成長していると感じられる	3.134	0.94	0.006	-0.053	0.016	0.027	0.874	0.767
毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う	2.598	0.72	0.439	0.081	0.209	-0.051	-0.559	0.558
固有値			3.592	1.443	1.221	1.069	1.020	
寄与率 (%)			25.658	10.310	8.720	7.635	7.283	
累積寄与率 (%)			25.658	35.969	44.688	52.323	59.606	

表3 育児不安尺点と下位尺度得点との相関 (n=112)

	育児不安得点 rs (p)	下 位 尺 度				
		精神的苦痛 rs (p)	疲 労 感 rs (p)	役割不全感 rs (p)	束 縛 感 rs (p)	不 達 感 rs (p)
精神的苦痛	0.698 (<0.001)					
疲 労 感	0.829 (<0.001)	0.496 (<0.001)				
役割不全感	0.529 (<0.001)	0.248 (0.008)	0.355 (<0.001)			
束 縛 感	0.516 (<0.001)	0.290 (0.002)	0.267 (0.004)	0.179 (0.059)		
不 達 感	0.342 (<0.001)	0.096 (0.312)	0.169 (0.076)	0.048 (0.617)	-0.009 (0.929)	

Spearman の順位相関

2) 育児不安尺度得点と下位尺度得点との相関

育児不安得点と下位尺度得点との関連を明らかにするために Spearman の順位相関係数を求めた(表3)。その結果、育児不安得点と最も相関係数が高かった下位尺度は「疲労感」であり、次いで「精神的苦痛」、「役割不全感」であった。下位尺度間の相関は、「精神的苦痛」と「疲労感」、「疲労感」と「役割不全感」が相関係数0.3以上であり、「束縛感」は「精神的苦痛」や「疲労感」と相関係数が0.25以上であった。「不達成感」はどの下位尺度とも相関が認められなかった。

3) 属性と育児不安得点との関連

112名の育児不安得点の平均値(±標準偏差)は36.7(±4.7)であった。対象の属性(初産別、就労の有無、家族形態、一ヶ月時の栄養法)と育児不安との関連をみるために、育児不安得点や下位尺度得点を各属性の2群間で比較した。その結果、初産別では、経産群の「役割不全感」得点が初産群に比べて有意に高かった(表4)。就労の有無では、就労群の「疲労感」得点が非就労群に比べて有意に高かった(表5)。家族形態別では育児不安得点および下位尺度得点に有意な差は認められず(表6)、一ヶ月時の栄養別では、母乳群の「疲労感」得点が混合・人工栄養群に比べて有意に高かった(表7)。

表4 初経産別に分類した育児不安得点と下位尺度得点 (n=112)

	初産群 (n=51) mean (SD)	経産群 (n=61) mean (SD)	p 値
育児不安得点	36.2 (5.0)	37.0 (4.4)	0.363
精神的苦痛	8.8 (1.8)	8.6 (1.5)	0.492
疲労感	9.7 (2.0)	10.0 (2.1)	0.45
役割不全感	4.5 (1.2)	5.3 (1.0)	<0.001
束縛感	7.4 (1.2)	7.6 (1.3)	0.389
不達感	5.8 (1.0)	5.7 (1.0)	0.393

Mann-Whitney の U 検定

表5 就労の有無と育児不安得点および下位尺度得点 (n=112)

	就労群 (n=53) mean (SD)	非就労群 (n=59) mean (SD)	p 値
育児不安得点	37.5 (4.3)	35.9 (4.9)	0.155
精神的苦痛	8.9 (1.5)	8.5 (1.8)	0.123
疲労感	10.3 (2.3)	9.5 (1.7)	0.027
役割不全感	4.9 (1.1)	5.0 (1.2)	0.444
束縛感	7.7 (1.2)	7.3 (1.3)	0.199
不達感	5.8 (1.0)	5.7 (1.1)	0.952

Mann-Whitney の U 検定

表6 家族形態と育児不安得点および下位尺度得点 (n=112)

	核家族群 (n=87) mean (SD)	複合家族群 (n=25) mean (SD)	p 値
育児不安得点	36.7 (4.9)	36.5 (4.1)	0.69
精神的苦痛	8.7 (1.7)	8.8 (1.7)	0.784
疲労感	9.9 (2.2)	9.9 (1.6)	0.941
役割不全感	4.9 (1.1)	5.1 (1.4)	0.554
束縛感	7.6 (1.2)	7.1 (1.3)	0.193
不達感	5.7 (1.0)	5.8 (1.1)	0.735

Mann-Whitney の U 検定

表7 一ヶ月時の栄養法と育児不安得点および下位尺度得点 (n=112)

	母乳群 (n=62) mean (SD)	人工・混合群 (n=50) mean (SD)	p 値
育児不安得点	37.2 (5.1)	36.0 (4.0)	0.118
精神的苦痛	8.7 (1.8)	8.7 (1.4)	0.665
疲労感	10.2 (2.0)	9.4 (2.0)	0.029
役割不全感	5.0 (1.2)	4.9 (1.2)	0.35
束縛感	7.5 (1.2)	7.4 (1.3)	0.802
不達感	5.8 (1.0)	5.7 (1.1)	0.613

Mann-Whitney の U 検定

4) 育児不安得点および下位尺度得点と各期の SE 得点との関係

112名の SE 得点の平均値 (±標準偏差) は妊娠期36.0 (±5.9), 入院中36.4 (±6.3), 一ヶ月時36.6

(±6.2) であり, 各期の SE 得点間に有意差は認められなかった ($p=0.739$). 育児不安得点および下位尺度得点と各期の SE 得点との関連をみるために相関分析を行った. その結果を表8に示す. 育児不

(6)

産褥一ヶ月時の母親の育児不安と Self-Esteem との関連

表 8 育児不安得点および下位尺度得点と各期の SE 得点との相関 (n = 112)

	妊娠期 SE 得点 rs (p)	入院中 SE 得点 rs (p)	一ヶ月時 SE 得点 rs (p)
育児不安得点	0.258 (0.006)	0.224 (0.018)	0.340 (<0.001)
精神的苦痛	0.287 (0.002)	0.198 (0.037)	0.321 (<0.001)
疲労感	0.240 (0.011)	0.228 (0.016)	0.274 (0.003)
役割不全感	0.287 (0.002)	0.272 (0.004)	0.330 (<0.001)
束縛感	0.064 (0.502)	0.089 (0.349)	0.230 (0.014)
不達感	-0.201 (0.033)	-0.209 (0.027)	-0.194 (0.040)

Spearman の順位相関

表 9 育児不安尺度項目の回答 2 群間における一ヶ月時 SE 得点の比較 (n = 112)

育児不安尺度項目		回答	n	mean (SD)	p 値
精神的苦痛	毎日はりつめた緊張感がある	YES 群	80	37.4 (5.3)	0.078
		NO 群	31	34.7 (7.8)	
	自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう	YES 群	86	37.5 (5.5)	0.019
		NO 群	26	33.5 (7.3)	
子どもを育てるためがまんばかりしていると思う	YES 群	85	37.5 (5.9)	0.01	
	NO 群	27	33.7 (6.2)		
疲労感	毎日くたくたに疲れる	YES 群	39	37.2 (6.1)	0.541
		NO 群	73	36.2 (6.2)	
	朝、目ざめがさわやかである (*)	YES 群	61	36.0 (6.6)	0.508
		NO 群	51	37.2 (5.7)	
考え事がおっくうである	YES 群	65	38.2 (5.1)	0.003	
	NO 群	47	34.3 (6.9)		
生活の中にゆとりを感じる (*)	YES 群	56	35.3 (6.4)	0.08	
	NO 群	56	37.8 (5.8)		
役割不全感	自分は子どもをうまく育てていると思う (*)	YES 群	41	33.6 (6.6)	0.0002
		NO 群	71	38.3 (5.2)	
	子どものことでどうしたらよいかわからなくなることがある	YES 群	44	38.1 (4.8)	0.054
		NO 群	68	35.6 (6.8)	
束縛感	子どもがわずらわしくて、イライラしてしまう	YES 群	86	37.4 (5.8)	0.015
		NO 群	26	33.7 (6.9)	
	子どもは結構一人で育っていくものだと思う (*)	YES 群	61	36.3 (7.0)	0.881
		NO 群	51	36.9 (5.2)	
子どもをおいて外出するのは、心配で仕方ない	YES 群	23	37.8 (5.6)	0.371	
	NO 群	89	36.2 (6.3)		
不達感	育児によって自分が成長していると感じられる (*)	YES 群	40	39.2 (6.3)	<0.0001
		NO 群	72	35.1 (5.7)	
	毎日毎日、同じことの繰り返ししかしていないと思う	YES 群	66	37.2 (5.9)	0.226
		NO 群	46	35.7 (6.6)	

Mann-Whitney の U 検定 (*) 逆転項目

安得点は各期の SE 得点と正の相関があり、相関係数は一ヶ月時 SE 得点が最も高く、次いで妊娠期 SE 得点であった。下位尺度においては、「精神的苦痛」、「役割不全感」が一ヶ月時 SE 得点との間で相関係数 0.32 以上の正の相関、妊娠期 SE 得点との間で相関係数 0.28 以上の正の相関がみられた。

5) 育児不安尺度得点と一ヶ月時 SE 得点との関係
育児不安尺度の各項目において「あてはまる」、「ややあてはまる」を選んだ母親を YES 群とし、「あてはまらない」、「ややあてはまらない」を選んだ母親を NO 群として 2 群に分類し、一ヶ月時 SE 得点の比較を行った。その結果を表 9 に示す。有意

差のある項目は6項目であり、そのうち「自分一人で子どもを育てているのだという圧迫感を感じてしまう」、「子どもを育てるためにがまんばかりしていると思う」、「考え事がおっくうである」、「子どもがわずらわしくてイライラしてしまう」の4項目において YES 群の SE 得点は NO 群に比べて有意に高かった。また、「自分は子どもをうまく育てていると思う」については YES 群の SE 得点は NO 群に比べて有意に低く、「育児によって自分が成長していると感じられる」は、YES 群の SE 得点が NO 群に比べて有意に高かった。

IV. 考 察

1. 育児不安の内容

本調査で使用した牧野⁷⁾の育児不安尺度は因子分析の結果、5因子より構成されており、その育児不安得点は下位尺度の「疲労感」や「精神的苦痛」と強い相関を示した。牧野は、産業疲労測定用に考案された「蓄積的疲労兆候調査票」を参考に育児不安尺度を作成したことから、この尺度には育児による疲労感やその疲労感の蓄積や子育ての圧迫感からくる精神的苦痛の要素が強く反映されている。また、下位尺度の「役割不全感」の質問項目は育児への自信のなさからくる子の現状や将来に対する漠然とした恐れを問う項目であると考えられる。「役割不全感」と「疲労感」との相関、「疲労感」や「精神的苦痛」と「束縛感」との相関からみると、育児による疲労に加えて主となって育児の責任を負うという圧迫感から自分で自分を束縛するような閉塞感、児の将来に対する漠然とした不安などが絡まり、育児不安の状態を呈していると考えられる。

2. 対象者の属性と育児不安

対象者の属性（初経別、家族形態、就業の有無、一ヶ月時の栄養法）と育児不安得点とは関連が認められなかったが、下位尺度の「役割不全感」において初産婦に比べて経産婦の得点が有意に高かった。先行研究では乳児の心配事の全ての項目が初産婦に有意に多かった¹³⁾との報告や第一子の母親の育児不安が第二子以降の母親より強かった²⁾との報告があるが、本研究ではこれらの先行研究に反する結果であった。その理由として、「役割不全感」の内容が一ヶ月時の育児不安というより、子の成長に伴う将来に対する漠然とした恐れを問うものであり、経産婦は上の子どもの育児を考えて記載したと考えられる。育児不安への対応として経産婦には上の子を含めた指導が必要と橋本ら¹³⁾は述

べており、本調査においても下の子どもが生まれたことによる嫉妬や赤ちゃんがえりなど上の子どもの育児に対する支援の重要性が示された。

就業の有無では下位尺度の「疲労感」において就業群の母親の得点が有意に高かった。産褥一ヶ月時は産休中のため就業の有無による疲労感には差がないと考えられたが、就業時の蓄積された疲労の影響やあるいは就業していた母親は産前休業から引き続き産後休業に入り、育児に専念するなかで社会からの疎外感を感じ、それがより疲労感を増長させる結果になっているのかもしれない。一ヶ月時の栄養方法では母乳栄養の母親の「疲労感」が混合・人工栄養の母親に比べて高かった。これは、母乳栄養は人工・混合栄養と比較して授乳が頻回であることや他者に授乳を代行してもらえないことなどから母親の疲労が蓄積するためと考えられた。家族形態では下位尺度においても差はなく、ほとんどの母親に育児支援者がいたことや産褥一ヶ月までは実家で過ごす母親もいることから差がなかったと考えられる。

3. 育児不安得点および下位尺度得点と SE 得点との関係

本研究の育児不安得点の平均値は 36.7 ± 4.7 であり、牧野の 32.9 や北村の $34.8^{15)}$ に比べて高い値であった。その理由には、月齢が進むほど育児適応が高まる¹⁶⁾といわれ、牧野や北村の調査は3歳未満あるいは4歳未満の乳幼児をもつ母親であり、本調査は育児に不慣れな産後一ヶ月時であったことが考えられる。また、母親の SE 得点は妊娠期、入院中、一ヶ月時で徐々に上昇はみられたものの有意差は認められなかった。藤本ら¹⁷⁾の調査でも産褥3日目から産褥一ヶ月時に SE 得点の変化がなかったと報告しており、出産やその後一ヶ月間の育児では大きく変化しないと考えられる。

母親の SE 得点と育児不安得点との相関は一ヶ月時 SE 得点が最も強く、次いで妊娠期 SE 得点であった。また、下位尺度では、妊娠期 SE 得点と一ヶ月時 SE 得点はともに「精神的苦痛」、「役割不全感」との相関が他の下位尺度より強かった。このことは、育児開始前の SE と育児開始後一ヶ月時の SE が育児不安との関連において類似していることを示し、一ヶ月時の育児不安の程度は妊娠期の SE 得点を知ることである程度推測できるのではと考える。

母親の SE 得点が育児不安得点や下位尺度の「精神的苦痛」や「疲労感」、「役割不全感」と正の相関がみられたことは、SE が高い母親ほど育児による精神的苦痛や疲労、不安を感じやすいことを示している。これは、先行研究の母親の育児不安が高いと自己肯定感

が低い¹⁰⁾という結果やこれまでに直面した問題を解決できたという意識の高い人は、低い人に比べて STAI による不安得点が有意に低かった¹⁸⁾という結果から「SE 得点が高い母親ほど育児不安得点が低い」という筆者らの予測に反していた。SE 得点は、自分が自分自身について「これでよい (good enough)」と感じる程度を示すことから自分に対する自信ともいえる。一方、子育てに対する不安は子育てに向かう時に起こりうる困難や問題への対処に対する見通しの不透明さから生じる情動反応¹⁹⁾と定義され、予測できない漠然とした不安を含んでいる。自分に対する自信を持つ母親ほど子育てにおける漠然とした不安が増すという結果からは、妊娠期に SE の高い母親は育児開始後に育児不安が高くなることが予想される。原口¹⁰⁾は母親自身がもつ 3 側面 (家庭人としての自分、社会人および職業人としての自分、個人としての自分) の理想と現実の構成割合に生じたギャップと育児不安との関連を調査し、「家庭人としての自分」の構成割合が理想に比べて現実が上回れば上回るほど、そして「個人としての自分」の構成割合が理想に比べて現実が下回れば下回るほど育児不安が喚起されやすいと報告している。SE 得点が高い母親は、3 側面のうち「個人としての自分」の理想の割合が大きいのではないだろうか。そのため、理想と現実とのギャップが大きくなり育児不安得点が高い結果になったと考えられる。また、SE 得点が高い母親は、母親役割としての理想が高いのではないだろうか。そのため現実とのギャップが大きく育児不安得点が高くなったということも考えられる。

育児不安尺度項目 2 群間において一ヶ月時 SE 得点に有意差があった項目からは SE の高い母親が、育児を一人で頑張り圧迫感や疲労感そしてイライラを募らせている状況が推測される。また、一方「育児によって自分が成長していると感じられる」という項目において YES 群の母親の SE 得点が NO 群に比べて有意に高かった。このことは SE の高い母親は育児を自己成長の一つと捉えて、頑張らなくてはいけなくてか一生懸命にしないでと考えると、その結果、疲労し圧迫感を感じている状況にあることを示しているのではないだろうか。島田らの産後一ヶ月間に関する全国調査でも、退院後ほとんどの母親が家事援助を得ていたにも関わらず、6～7 割以上の母親は疲労し、育児を投げ出したくなる母親が 1 割以上いた¹³⁾と報告されており、出産から一ヶ月間は特に疲労の強い時期である。育児は延々と続くことから、妊娠期に SE を測定し、得点が高い母親に対しては退院後に一人で頑張りすぎないように、周囲の者が意識して援助の手を差し伸べることができるような支援策を育児開始前より立てる必要

があると考えられる。

V. 結 論

妊娠末期、入院中、一ヶ月時の母親の SE 得点には差がなかった。SE 得点の高い母親ほど一ヶ月時の育児不安得点が高く、下位尺度では「精神的苦痛」、「疲労感」、そして「役割不全感」が高かった。その理由として SE の高い母親は理想の母親役割に向けて育児に積極的に取り組み、精神的苦痛や疲労感を増強させていることが考えられた。一方で育児によって自分が成長していると考えられる母親の SE 得点は高かった。育児不安の対策として、妊娠期に SE を測定し、得点の高い母親には一人で頑張る育児にならないような支援策を育児開始前より立てることが必要である。

謝 辞

本研究を行うにあたり、研究へのご協力を快く承諾していただきました妊産婦の皆様にご心より御礼申し上げます。

また、本研究の趣旨をご理解くださり、ご多忙中にも関わらずご協力、ご指導いただきました A 総合病院、B 総合病院、C 産婦人科医院の管理者、外来および病棟スタッフの皆様にご心より御礼申し上げます。

本研究は平成21年度秋田大学大学院医学系研究科保健学専攻修士論文の一部を加筆修正したものである。

文 献

- 1) 谷口和加子：心のケアと小児保健・育児不安への支援。小児科臨床53増刊号：1095-1100, 2000
- 2) 綿貫恵美子, 鈴木こずえ：月齢1か月の乳児を抱える母親の育児不安に関する一考察, 母性衛生38(2)：227-232, 1997
- 3) 岩田銀子, 森谷 潔：初妊婦の不安とソーシャルサポートに対する自尊感情の影響, 北海道大学大学院教育学研究科紀要第99号：93-99, 2006
- 4) 蘭 千尋：第17章 セルフエスティームの形成と養育行動, セルフエスティームの心理学, 初版第8刷, 遠藤辰雄・井上祥治・蘭千尋編, ナカニシヤ出版, 京都, 1992, 168-177
- 5) 野口真貴子：女性に肯定される助産所出産体験と知覚, 日本助産学会誌15(2)：7-14, 2002
- 6) 新道幸恵, 和田サヨ子：母性の心理社会的側面と看護ケア, 医学書院, 東京, 1990, 29-36
- 7) 牧野カッコ：乳幼児を持つ母親の生活と〈育児不安〉,

- 家庭教育研究所紀要 3 : 34-56, 1982
- 8) 吉永陽一郎：乳幼児健診とその周辺 I. 総論 8. 育児不安—背景・見分け方とその対応—, 小児科臨床62(12) : 2595-2600, 2009
- 9) 阿部(河本) 亜希子, 小林淳子：産後の母親の育児の自己効力感と関連要因に関する縦断的検討, 北日本看護学会誌 7 (1) : 19-28, 2004
- 10) 原口由紀子, 松浦治代・他：母親の個人としての生き方志向と育児不安との関連, 小児保健研究64(2) : 265-271, 2005
- 11) 嶋原依子：乳幼児を持つ母親の育児不安感に関する研究—母子画を用いて—, 日本応用心理学大学発表論文集75 : 123, 2008
- 12) 原奈津子：自尊感情尺度, 心理測定尺度集 I—人間の内面を探る—, 初版, 山本眞理子編, 堀洋道監修, サイエンス社, 2001, 29-31
- 13) 島田三恵子, 渡部尚子・他：産後1ヶ月の母子の心配事と子育て支援のニーズに関する全国調査, 小児保健研究60(5) : 671-679, 2001
- 14) 橋本美幸, 江守陽子：産後12週までの母親の育児不安軽減と目的とした指導内容の検討, 小児保健研究69(2) : 287-295, 2010
- 15) 北村愛子：母親の育児不安と育児不安が養育行動に及ぼす影響, 山梨県立看護大学短期大学部紀要 4 (1) : 65-78, 1998
- 16) 國清恭子, 阿部祥子・他：幾時期の母親の出産体験と心理的健康に関する研究, 北関東医学54(2) : 125-135, 2004
- 17) 藤本 薫, 島袋香子・他：育児生活のコーチングが褥婦の情緒的側面に及ぼす影響, 日本女性心身医学会雑誌11(3) : 243-249, 2006
- 18) 亀井睦子, 増子恵美・他：育児の母親の不安の変化と要因(第1報)—STAI—の結果から, 母性衛生40(2) : 265-271, 2005
- 19) 奥富庸一, 橋本佐由理・他：「育児自信感」および「育児不安感」の尺度作成に関する研究, メンタルヘルスの社会学13 : 38-49, 2007

The Correlation between Maternal Child-Rearing Anxiety and Self-Esteem during Late Pregnancy, Early Postpartum and One-Month Postpartum

Kaori WATANABE* Hitomi SHINOHARA**

* Akita Kumiai General Hospital

** Akita University Graduate School of Health Sciences

A questionnaire survey was conducted to analyze the correlation between maternal child-rearing anxiety at one-month postpartum and Self-Esteem (hereinafter expressed as SE) in late pregnancy, in early postpartum, and at one-month postpartum. The subjects were 112 mothers, and were surveyed using the Rosenberg Self Esteem Scale at three stages (late pregnancy, early postpartum, one-month postpartum) and by the Child-Rearing Anxiety Scale at one-month postpartum. In the results, no significant differences in SE scores during late pregnancy, early postpartum, and one-month postpartum were found. The SE scores correlated positively with child-rearing anxiety scores, and also correlated positively with “emotional distress”, “tiredness” and “sense of role-inadequacy”, as a lower category of the child-rearing anxiety scale. Mothers with a higher SE score showed higher child-rearing anxiety scores. The speculated reason was that mothers with high SE tended to build up emotional distress and tiredness because of proactively approaching child-rearing in order to be an ideal maternal role model.

Survey results indicate the need for supportive measures prior to child rearing as a countermeasure against child rearing anxiety. Supportive measures would benefit mothers who score high on SE measurements taken during the pregnancy phase. As a result of these measures mothers would not feel so alone during their child rearing efforts.